

研究プロジェクト趣意

松 浦 京 子

ホスピタリティ hospitality という言葉を目にし耳にすることは最近では珍しいことではない。さまざまな用法、意味合いで使われているようであるが、そのもっともシンプルな訳語は「もてなし」であろう。実際、オクスフォード・イングリッシュ・ディクショナリ OED で引いてみても、「ホスピタブルである行為、ホスピタブルであることの実践。ゲスト、訪問者、見知らぬ者を、寛大さと善意をもって受け入れること、もてなすこと」という解説がまず上がってくる⁽¹⁾。近年、外食産業や観光業などがホスピタリティ産業と総称され、飲食や宿泊施設の提供に関わるサービス行為、もしくはそのサービスの概念を表すものとしてホスピタリティが使われるのは、この「もてなすこと」という意味合いからである。

しかし、ホスピタリティは本来、多義性を持つ言葉、概念である。現にホスピタリティを表題に掲げた書物を書店で探してみれば、『ホスピタリティとフィランソロピー』『看護とホスピタリティ』『ホスピタリティが日本の教育を変える』⁽²⁾といったものが目に付くように、多様な概念を伝える言葉として用いられている。OED においても、波及語として「ホスピタブルな団体、ホスピタブルな施設」、「ホスピタルの第二の意味、すなわち窮乏者の住居と扶養のための慈善施設、困窮者、障害者、高齢者の収容施設」等の意味にも言及している⁽³⁾。つまり、ホスピタリティとはまず第一に、人が人、すなわち他者と出会う際にホストとしてとる行為、それも好意的な応対を表す言葉であるが、加えて、貧者や社会的弱者に対する救護の提供の意味も含むと解されるのである。これをもう少し敷衍すれば、他者に、その他者が必要としている恩恵や世話、便宜、サービスなどを提供すること、つまり多様なケアの供与とすることができよう。

しかし、同時にホスピタリティは、ホスト側のケア供与行為以上の意味を持つ概念でもあるのである。それは、平成4（1992）年に発足した日本ホスピタリティ研究会（学会の設立準備委員会として設立され、96年に日本ホスピタリティ学会に発展的に改組し97年からは日本ホスピタリティ・マネジメント学会へと改称している）の研究会（学会）活動趣意文からも読み取れよう。この研究会は、活動目的に「ホスピタリティに関する調査研究を通じて、学術的進歩を図り、産業振興及びその普及を行うことにより、人、組織の活性化及び地域環境の健全なる発展に寄与することを」掲げている⁽⁴⁾。その後、学会となっても「物質的のみならず精神的にも豊かで快適な社会の形成に努力」する必要性に言及し「その根底となる理念をホスピタリティ」と捉え、そして「産業界において……人間が生きるに値する新たな価値創造への動きが顕在化している

ところ。本学会は、このような動向の研究を『ホスピタリティ』の研究と位置づけております」とも述べている⁽⁵⁾。すなわち、ホスピタリティを人間相互の関係、集団、組織間の関係に関わる肯定的、積極的価値を規定（概念化）する理念と見ているのである。

実際、ホスピタリティは歴史的に見ても、ケアをほどこす側（ホスト）の行為を意味するだけではなく、ホストとその相手であるゲストとの間に一定の関係、それも良好な関係が生じることを認識して用いられてきた。たとえば、ベドウィンの間では今も慣習とされている見知らぬ旅人に飲食や宿を提供するという文化的伝統や、古代ギリシア、ローマの哲人たちが有徳人の美德として推奨した貧民に食事をふるまうという行為も、ホストが旅人や貧者に好意を示したことに他ならず、それはすなわちホスピタリティである⁽⁶⁾。こうしたホスピタリティには同時に、ケアを提供された側（ゲスト）がホストに対して好感や感謝、尊敬の念を持つことを、その結果として社会的安定性が生じることが期待されていたことが、F・ヒールやE・テルファの研究によって明らかにされている。つまりは、古代の有徳人は貧民からの感謝と支持を得て社会的名声を高め、そして、クリエンテ（庇護民）制度の形成にもつなげてもらい、中世から近世初めのイングランドではジェントルマンはホスピタブルな行為をとることを期待されると同時に、そうすることでエリートとしての社会的名誉、栄光を得ていたのである⁽⁷⁾。すなわち、J・パージェスが指摘するように⁽⁸⁾、ホスト（提供者）とゲスト（享受者）両者の間に、相互性を伴う一定の関係が生じること、ひいては社会的結束、安定につながりうる要素を含んでいること、これが古今を通じてのホスピタリティの特質でもあると言えよう。

以上のような理解を前提に、本研究プロジェクトでは、ホスピタリティを、飲食やサービスの提供、または社会的弱者への恩恵供与、介護、看護などの多様なケア提供行為であり、同時に、その結果として生じる良好な人間関係ならびに肯定的価値を意味する概念と捉えている。言い換えれば、人が人（他者）と出会う際に生じる関係（状況）のいくつかの局面で意識される概念であり、それゆえに人間の日常生活に密接に関わって存在する言葉と理解する事が出来ると考えられる。そこで、日常生活において不可欠の存在であり、それだけに生活領域において他の領域よりも可視的存在であった女性が、この日常の生活に不可欠な行為、概念であるホスピタリティにどのように関わっていたのか、に注目することとした。同時に、それはまた、ホスピタリティを女性文化にどのように内在化させ、かつそれに影響を与えることとなったのか、という研究テーマを設定することでもあったのである。実際にも、ホスピタリティ概念が体现されるさまざまな局面において、すなわち、「もてなし」的概念にあてはまる飲食の準備、提供においても、弱者への恩恵供与を中核とする救済行為、活動という「施し」に関しても、そしてなにより「いやし」を旨とする介護や看護といった医療的救護活動部分にあっても、女性は歴史的にも大きな役割を果たしてきたし、また、現代社会においてもそういう存在であり続けている。

それゆえ、本プロジェクトの研究メンバー各自は、日本ならびに西欧を中心に過去および現

代社会において女性が担う、もてなし、施し、いやしの活動を検証し、そこに見られる女性文化との関係（文化が規定した役割、逆に活動が文化を創造する過程）を考察することを目指すこととした。具体的には、食物供給と女性の関わりを南直人が、現代の看護職、看護活動をめぐる問題を梶谷佳子、神崎光子が、歴史上の女性の慈善活動を細川涼一、松浦京子が担当することとした。

また、一方では、様々なホスピタリティの在りようを検証することも、当プロジェクトの活動目標とした。その過程で外部から講師を招く研究会を持ち、2004年度には「医療」との関わりで、順正短期大学の沢山美果子教授による「〈生む〉身体有位相—近世末・一閥藩の懐胎・出産取締りに見る」と題した研究報告を、2005年度には「食ともてなし」との観点から、高知女子大学専任講師（当時）村瀬敬子氏による「近代日本における家庭料理の成立と冷蔵庫」と題した報告を、2006年度には「近代社会におけるホスピタリティの変容」を意図して、高知大学人文学部助教授（当時）川本真浩氏による「博覧会と「もてなし」—19世紀後半イギリスにおける博覧会の変貌—」の研究発表を受け、ホスピタリティ要素の関わり方をそれぞれの分野において探究した。そして、2007年度では「社会政策とホスピタリティ」との関わりから、富山大学人文学部の小野直子准教授による研究発表を予定している。なお、細川は、上述の研究に加えて中世日本における出産（およびその介護）に関わるテーマも追求し、河越重頼の娘をめぐる歴史的謎の解明にも挑戦している。

注

- (1) *Oxford English Dictionary* (2nd ed.), vol. VII Oxford, 1989, p.415.
- (2) 名東孝二、山田暁、横沢利昌編著『ホスピタリティとフィランソロビー産業社会の新しい潮流』税務経理協会、1994年、古閑博美、中谷千尋、齊藤茂子『看護とホスピタリティ』ブレーン出版、2001年、馬場信治『ホスピタリティが日本の教育を変える生徒も講師も生まれ変わる感動のエピソード』出版文化社、2006年。
- (3) OED, p.415.
- (4) 梶本保邦「日本ホスピタリティ研究会趣意」『HOSPITALITY』日本ホスピタリティ研究会、創刊号、1994年、1頁。
- (5) 石井学「日本ホスピタリティ・マネジメント学会趣旨」『HOSPITALITY』9号、2002年、3頁。
- (6) Visser, M., *The Rituals of Dinner*, Tronto, 1991; Heal, F., *Hospitality in Early Modern England*, Oxford, 1990.
- (7) *Ibid.*; Telfer, E., *Food for Thought: Philosophy and Food*, london, 1996.
- (8) Burgess, J. 'Perspectives on gift and exchange in hospitable behaviour', *Intenatioal Journal of Hospitality Management*, 1-No.1, 1982, pp49-59.

「ホスピタリティと女性文化・研究プロジェクト」特集として、松浦京子「研究プロジェクト趣意 —ホスピタリティと女性文化—」、南直人「食のホスピタリティ —近代ヨーロッパの飲食提供業に関する研究の可能性—」、川本真浩「一九世紀後半イギリスにおける博覧会と「もてなし」—博覧会にみるホスピタリティとしての娯楽的要素—」、松浦京子「一九世紀イ

ギリスにおけるディストリクト・ヴィジティング ―女性文化としてのホスピタリティ、覚え書き―、細川涼一「河越重頼の娘 ―源義経の室―」を掲載する。

このうち、南の「食のホスピタリティ ―近代ヨーロッパの飲食提供業に関する研究の可能性―」は、「ホスピタリティもてなし」という視点から飲食提供という事象の本質について考察することをめざした論考であり、松浦の「一九世紀イギリスにおけるディストリクト・ヴィジティング ―女性文化としてのホスピタリティ、覚え書き―」は、女性文化とホスピタリティの関わりを探るための準備として、19世紀イギリスの中流階級女性が担当した慈善博愛活動であるディストリクト・ヴィジティングの展開のなかにホスピタリティ理念の発露と女性にとっての意義を探ろうとした論考である。今後の研究の序論、見取り図的位置づけとなっている。一方、川本の「一九世紀後半イギリスにおける博覧会と「もてなし」―博覧会にみるホスピタリティとしての娯楽的要素―」は、来場者として男性、女性を問わず多種多様な人々が参画した博覧会というイベントの変貌をホスピタリティ（もてなし）の観点から読み解いた論文である。博覧会という近代社会が「発明した」イベントにおいて「もてなし」が一定の意味と機能を持っていたことを検証することで、「近代社会におけるホスピタリティ」の一つの形態が明らかにされている。また、細川の「河越重頼の娘 ―源義経の室―」は、日本中世女性史における新たな発見を指摘するものであるが、同時にそれは、中世日本における出産と介護（いやしとしてのホスピタリティ）に関わるテーマを取り扱ったものでもある。